

研究ノート

感情移入と他者の構成

Empathy and the Construction of Others

信木晴雄

Haruo NOBUKI

保健福祉学部コミュニティ福祉学科

キーワード：感情移入，モノドロジー，間主観性

抄 録

- 【目的】本研究の目的は、現象学的人間論とコミュニティ福祉の関係性を明確にするために、他者経験の起源と妥当性を主題とする。
- 【方法】現象学の提唱者であるフッサールの著作と草稿群を手引きとする文献研究とする。
- 【結果】他者経験の可能性としての主観性の間主観的拡張を結論とする。そのために、ライプニッツの提唱したモノドロジーに経験の拡張の首尾一貫性について理論的補足を見出す。
- 【考察】心理学的な感情移入の主体である人格として露呈する相互に認め合う間主観性の世界において、相互承認を通じ形成されるコミュニティ福祉における共同体に一致する実践的な妥当性が要請される。

I. はじめに

フッサールは心理学者ブレンターノに師事したが、同門の兄弟子、シュトゥンプフのもとで学位論文「数の概念」を完成している。シュトゥンプフの後任としてミュンヘン大学教授となったリップスは、イギリス経験主義のロックの内観心理学の影響のもとに、純粹現象学と呼ばれた記述心理学によって意識を實在として捉えた。意識を内観によって本質として記述する純粹現象学は、自然科学と類比的に意識体験を因果連関としての法則連関によって捉える説明心理学とは明確に区別される。

フッサールは、一方では心理学によって論理学を基礎づけようとしたリップスの一元論を心理主義として『論理学研究』によって批判したが、他方で心的實在を身体に依存した心理物理的現象として捉えたブレンターノ同門として、私の身体から他者の身体を類比的に捉え、そこに自己移入を試みるリップスの感情移入説から、自我および間主観性の問題（世界における他

者経験の構成）について重要な手がかりを得ている。

ブレンターノ学派では、身体と結合した心としての主観は心理物理的實在と呼ばれた。フッサールは、さらに心的實在を具体的な自己経験（成長）と同一に留まる限界概念である自我極として二重に捉えた。フッサールにおいて、精神としての人格的な自我とは、自己を自己意識によって主観的に捉えている心的實在なのである。

II. 研究方法

文献研究を主な方法とする。主要な文献は、フッサールによる『デカルト的省察』『間主観性の現象学』『イデーニ II』であるが、生前に発表された著作は唯一『デカルト的省察』のみであり、その他は、遺稿や草稿群から繰り返し整理編集し直されている。遺漏なき形で出版されたテキストは少なく、断片や講義などを含む諸テキストから書かれた時期の隔たりや近接したテーマなどを顧慮し、意味ある脈絡を求めて繋ぎ合

わせなければならない。

Ⅲ. 結 果

1) 感情移入

感情移入とは、自らを他者（そこ）に置き入れる脱中心としての異他化を伴う。フッサールでは、受動的総合の次元に属する「対化」の現象に遡る。フッサールが「原初的領域」と呼ぶ、まだ他者の存在しない私だけの世界において、私の身体と物体とが類似性を通じて「対（つい）」をなすものとみなされることから、私の身体から他者の身体へと意味の移譲が行われるのが、感情移入（自己移入）である。リップスは、感情移入を他者に対する模倣の衝動と表出の衝動という本能（共同感得）によって説明している。フッサールにおいて、他者の構成（経験）は、人格主義的な態度、つまり表現を媒介とする相互関係を目的とした直接的な体験である感情移入によって説明される。

ただし、世界についてのわれわれの経験が、超越論的自我の構成機能として捉えられ、他者はあくまでも根源的な意味で客観的世界の構成の脈絡によって、人格に対する感情移入という窓を持ったモナドロジーとして理解されなければならない。諸主観の精神的な関係がモナドの窓としての感情移入によってもたらされる。他者の心を表現する現象が、他者を経験可能にするという理解されているからである¹⁾。

フッサールは、「対化」によって、自我に現前する異他の物体が、原初的体験から派生することを述べている。これは、たんなる心理的な現前としてではなく、他者の身体という異なる物体が私の身体と「対」になり連合するとき、共にある自我の経験の核を提供すると捉えているからである。他者の身体は、他者の自我を表現するとき、彼を理解する通路になる。

「統覚を基づけている複数の所与が連合的に覆い合うことによって、より高次の連合が行われる。一方の所与が、ある志向的対象、つまり多様な現出が連合的に呼び起こされる体系を表示する指標であるが、それはこの多様な現出の中で自らを示すことになり、その現出の様式の一つであるとき、他方の所与は同様に補足されて何らかの、ある類似した対象の現出となる²⁾」

他者は私の身体から類比的に身体という意味を受け取るとき「共現前」とされる。「共現前」とは、他者に入り込み、いわば他者の内に存在する統覚の合致が見いだされることである。このとき、世界は複数

の主観の共同による対象的な相関者として統一し、モノドロロジーが登場するのは、共同主観の機能としての相互関係をより明確化するためなのである。

2) モナドロジー

フッサールはモナドを次のように自我と結びつけている。

「現実のおよび可能的なコギト（我思う）における同一の自我を伴う多様な意識の所与（表象）と意識の諸段階とノエシスの諸形式（定立）が全てモナドに帰属している³⁾」

モナド（表象）は、主観的体験の発生における具体的な構造として捉えられる。モナドには、自我の統一が帰属し、時間持続において伸び広がるあらゆる感覚性や運動の経過には、自我的なものが随伴している。それは、具体的な個体が時間持続として現在から新たな現在へと生成するからである。このようにして、モナド的な発生は本質法則のもとに規定される。

自我は自らの体験を顧みることによって同一性を認める。つまり、自分がコギトの主観であることを意識することができる。この時間充実ににおける内在的な一貫性は、自我の本質法則としての一貫性と現実性を随伴し、自分の判断として理性的な一貫性を決断や努力、愛情、憎悪などにおいて発揮する。個性性として的人格の自我は、現実のおよび可能的な態度決定の多様体全体を通じ、同一に留まるものである。フッサールは、この内在的な時間の持続と主観的な具体的生として展開するモナドについて、次のように述べている。

「内在的な時間の連続的な流れの中で組成される各持続統一は全て互いに結合して、絶えず生成し成長するモナド的な意識流へ統一され、そしてその意識流には純粹自我が帰属する⁴⁾」

ライブニッツは、モナドロジーにおける魂と身体の調和について、次のように述べている。

「すべての身体は普遍的精神の意図に従って配備され、すべての魂は各々の射程と視点に応じて本質的に宇宙を表現し、宇宙の生きた鏡であり、それゆえ世界そのものと同じだけ存続するからです。それはあたかも、神は魂が存在するのと同じだけ宇宙を多様化したようであり、根底において合致し現れにおいて多様な宇宙を、魂と同じだけ、縮約して創造したかのごとくです⁵⁾」

3) 身体と自我

人間は、必ずどこかに位置づけられる身体を伴い運動する存在である。つまり、身体と心は独自の経験的な統一（感覚性）を形成し、空間と時間の中に位置づけられるとき、自己意識は「適正な自然化」を獲得するとされる。主観的なものを自然の中に組み込むことは、自らの身体を動かし、内的な統覚を通じ、私が私の身体を外へ置き替え、自由な運動を想像する感情移入の働きによって、主観的なものの客観化へと結びつく。この感情移入が事物の間主観的な客観性としての自然を構成すると考えられる。そこで、他者の身体を私は心を持った身体として理解するからである。他者の身体に伴う外的現出は、間接的な仕方での意識生によって「共現前（准現在化）」を通じ内的に経験され得ると考えられている⁶⁾。

「共現前」とは、回想や想像など附带的に経験される経験様式であり、他者の身体が私のいる「ここ」から見られる場合と同様に、他者のいる「ここ」を起点とすれば、私の身体は「あそこ」という客観的な空間上の一点を占めることである。つまり、私は私の身体をどの他者にとっても同一の事物（別の事物）として考えることができるのである⁷⁾。

フッサールは、純粹自我（超越論的自我）とリアルな心的主観を区別している。心は物質的な身体事物としてリアルな統一性である。しかし、心（心的自我）はモナド的な意識連関の発生を備え、有心的な諸主観として結びつくことになる。それは、心が人間の身体と結びついて自然の中に位置付けられ、空間的に存在する物質的な事物であることによる。心的な実在が構成されるのは、空間に位置づけられる身体運動や感覚性など心理物理的な依存関係（意識の自然化）を通じてである⁸⁾。

また、フッサールは心的な諸体験が、身体と緊密に統一され、心の統一性と物質的な事物の統一性には広い範囲での類似性が現出様式として伴われるとしている。

「心は一つのモナド的連関について諸体験の中で根源的に表示される実在である⁹⁾」

IV. 考 察

1) 間主観性

フッサールは、超越論的自我の構成によって、客観性が間主観性として成立することを企図している。経験の首尾一貫性は「調和」と呼ばれる。フッサールは、

ライプニッツのモナドロジーから形而上学的神学的意味合いを捨象して、モナドの共同性を一つの地平に結び付けようとしている。モナドはコギトの自己覚醒の諸段階を含むものとして捉えられる。

フッサールは、このモナド的な永遠性を関係し合う人間主観による目的論的な無限性として理解している。客観的な自然に意味を与える学問論的な意義を備えた自我論としての構成的な現象学は、複数の自我の共可能的な全体性によって完成される¹⁰⁾。

モナドの自己展開は、高次の精神として、あらゆる自我の表象（覚醒から眠りまで）を包括する志向性によって導かれる。そこで実在的な自我とは、志向的体験の統一性として意識流の多様として統一され、間主観的な意識流である多数のモナドと連関する。ここでは、多数の自我が互いに感情移入を通じて間主観的な諸対象を構成する一つの連関へと相互に統合される¹¹⁾。

つまり、モナドは他者経験としての感情移入によって同一の客観的な世界を経験する。感情移入が他なる主観に存在妥当をもたらすからである。複数のモナドは相互に内属しており、そのさい、モナドは「窓を持つ」と言われる。私の身体ということ（私の視点）から方位づけられる世界現出（構成）に対して、他者の視点から見られた多様な世界現出をいかにして構成するのかが、間主観的な現象学の理論（超越論的自我の構成および複数主観による世界構成）に結びつくのである。このとき、他者は世界現象に帰属している。

ライプニッツでは、モナド（表象）は窓を持たず、それぞれの視点から神による「予定調和」に基づいて同一の宇宙を表出している。ライプニッツのモナドが窓を持たないのは、内的な表象の移行（欲求や活動など）が、外的な環境に依存しない自己完結的な状態であるからである。それは、デカルトの抽象的に普遍的なコギト還元主義を批判しており、「私は考える」と「様々なものが思惟される」とが、「志向性（意識は何ものかに向かう）」によって統合される諸現出に内属する調和原理に基づくのである。フッサールは、独我論的なデカルト主義の限界に気づき、世界と主体を等根源的に理解しようとして、他者経験が同一の世界構成することを企図しているのである。それは、神の摂理と人間の自由を調停しようとしたライプニッツの神学的な形而上学からその神義論的な最善観を捨象した形で、「超越論的自我」をモナドロジーによって拡張するという超越論的次元におけるパースペクティヴィズムである。フッサールは、心は内的経験としての実在であり、他の多くの心との交流によって外的経験にお

いても帰属している。すべてのモノダが一つの自然を構成する共同体であると理解されるからである¹²⁾。

2) 共同体の現象学

われわれが、他の諸主観をわれわれの主観的な環境世界に取り込み、われわれ自身を、同じ環境世界に取り込むとき、間主観的に成立する社会的な諸関係の領野が見出される。

人間の個人存在の意味は、相互存在としての共同存在の生活の豊かさに由来する。身体と心は相互に依存し合う共同現存在である。ひとは、賛美され、憎まれ、愛され、恐れられるなど他者を必要とする多様な存在形式を持っている。他者のために生きることは、自律的に生きようとする人間の本来の在り方になる。それは、自分自身を離れ、共同的な意味へ向かうとき、意味のコミュニティが一つの意味存在としてわれわれを社会的存在として充実するからである。他者への奉仕は、個別的な人格の自律の尊さと矛盾しない。真理、諸価値、道徳的規範は一般に相互に承認されたものとして間主観的な客観性を備えているからである。キリスト者として現象学者クワントによると人間の幸福とは、相互に依存する他者のための存在様式によるとされる。

「他者がわれわれと会って、そのひとが幸せであることを見るのは、いつでも嬉しいことだ。その時、われわれの存在、われわれの現前それ自身が他者にとって意味があることをわれわれに理解させてくれる¹³⁾」

V. む す び

私は他者の内で活動的に存在することができる。それは、私が他者の仕事を共有し、他者が私の仕事を共有しつつ働くからである。愛の共同体において、私は

考察しながら他者へと愛を向け、他者の中で他者の生と共に生きるからである。こうして、相互の人格を認める感情移入によって結びつく間主観的で精神的な共同世界において、私は他者と共に生きることを包摂するのである。

注)

- 1) 石田三千雄：フッサール相互主観性の研究，ナカニシヤ出版，65-96，2007.
- 2) Husserl, Edmund. *Cartesianische Meditationen*. Haag, 1950, 147.
- 3) Husserl, Edmund. *Ideen einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie Zweites Buch*. Haag, 1952, 112.
- 4) Husserl, Edmund. *Ideen einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie Zweites Buch*. Haag, 1952, 120.
- 5) ライプニッツ，谷川多佳子・岡部英男訳：ゾフィー・シャルロッテ宛書簡，岩波書店，146，2019.
- 6) Husserl, Edmund. *Zur Phänomenologie der Intersubjektivität Dritter Teil*. Haag, 1973, 693.
- 7) Husserl, Edmund. *Ideen einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie Zweites Buch*. Haag, 1952, 168.
- 8) Husserl, Edmund. *Ideen einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie Zweites Buch*. Haag, 1952, 138.
- 9) Husserl, Edmund. *Ideen einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie Zweites Buch*. Haag, 1952, 121.
- 10) レナート・クリスティン，酒井潔編著，大西光弘訳：現象学とライプニッツ，晃洋書房，158，2008.
- 11) Husserl, Edmund. *Ideen einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie Zweites Buch*. Haag, 1952, 111.
- 12) Husserl, Edmund. *Zur Phänomenologie der Intersubjektivität Dritter Teil*. Haag, 1973, 638.
- 13) レミ・クワント，早坂泰次郎監訳：人間と社会の現象学，勁草書房，116，1984.